
コスプレイヤー

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

コスプレイヤー

【Nコード】

N1932E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

美人だけれどとても厳しい学級委員長由比。ところが偶然コスプレ会場で彼女を見かけたクラスメイトの啓太郎は。学園恋愛コメディです。

コスプレイヤー

第一章

コスプレイヤー

高見沢由比はこのクラスの学級委員長である。眉目秀麗容姿端麗で有名であるがそれと共に自他共に対して非常に厳しいことでも知られている。そう、他人に対しても。

しかも学級委員長である。だから余計に問題なのであった。

「駄目よ」

「駄目っておい」

彼女が学級委員長を務めるそのクラスにいる木戸敬太郎はそう言われて思わず言い返した。彼の横には数人の同士の士が並んでいる。

「まだ言ってもいないぞ」

「言わなくてもわかるわ」

由比は腕を組み足を少し開いて厳しい顔で仁王立ちをして二人の前にいる。背は高く胸も大きい。ミニスカートの制服をしつかりと着こなした白い清楚なソックスによく似合う奇麗な脚だ。和風のすつきりとした美貌の顔だがそこにはやや吊り上がった厳しい目がある。奇麗だが厳しい感じのする目である。その目で啓太郎達を見据えているのだった。

「どうせあれよね。今度の休みに教室を使いたいのね」

「ああ、そうだよ」

啓太郎はそののほほんとした感じの顔を綻ばせて答える。

「いいだろう、ただダンスの練習をするだけなんだしさ」

「悪いことには使わないよ」

啓太郎達はブレイクダンスをしているのである。たまたまその休みの時は練習できる場所が学校にはなく教室を使おうというのだ。しかしそこに障壁があったということなのだ。実は彼等にはまともな部室がない。それでもものを置く場所にも困っている。新設の部なのでまだそうしたものはないのである。それで教室を使ったりもし

ているのだ。

「教室は勉強をすることよ」

「うっ」

「ダンスを踊る場所じゃないのよ」

全てを退ける強い言葉であった。

「わかったわね。だから駄目よ」

「駄目なのか」

「ダンスをしたいのなら外ですればいいじゃない」

これが由比の意見であった。

「するなどは言わないから。公園でも何処でも」

「雨が降ったらどうするんだよ」

「そうだよな」

「そうなら」

「そんなことは知らないわ」

また随分ときつい言葉であった。

「私の知ったことではないわ。そこは自分達で考えて」

「ちえっ、厳しいなあ」

「厳しいってどうか冷たいな」

「どっちでもいいわ」

そんな言葉は聞き慣れているのか全く平気だった。由比はその話を聞いても平気な顔のまま啓太郎達の話の聞いているのであった。

「とにかく。教室は使ったら駄目よ」

「ちえっ、先生はいいって言ってくれるのに」

「何で由比ちゃんだけ」

「由比ちゃんじゃないわよ」

呼び方にも言ってきた。ブレザーの制服の中にある胸がはちきれそうになりそれが反り返っている。姿勢がいいことの証拠だがそれでも目立つ。

「高見沢って呼んでね」

「高見沢さん」

啓太郎が渋々ながらも彼女をこう呼んだ。

「ええ。そういうことだからね」

そこまで言うのと踵を返した。そうして彼女は敬太郎達の前から姿を消した。後には慚然とした顔で地団駄を踏む啓太郎達がいるだけであった。

「やっぱり無理だったか」

「相変わらずだよな、由比ちゃんは」

本人がいなくなったのを確認してこの愛称で呼ぶ。

「何でああも堅苦しいんだかね」

「美人だしスタイルもいいのにな」

「しかも成績優秀スポーツ万能」

つまり完璧美少女というわけだ。そんな女の子も滅多にいない。

「あれでなあ。性格があんなに生真面目でなかったら」

「おかげでこっちは苦労するよ」

「そうだよな。まあ今回は仕方ないな」

啓太郎は溜息混じりに言うのだった。

「今回はな。公園で練習するか」

「そうだな。仕方ないけれど」

「公園の管理人さんに許可もらってな」

こういうことにはしっかりとした彼等であつた。だがそれでもどうにも気が晴れない。気が晴れないがそれでも彼等はダンスの練習には打ち込む。その休みで公園での練習が終わってからある程度はすっきりしたがそれでも気は完全には晴れてはいないのであつた。

この日彼等はジーンズやシャツといったラフな格好でダンスの練習に興じていた。見物人も来て彼等に明るく応対しながら練習をしていた。それが終わってその見物人達の話をつと耳に入れるのだった。

「そういえばさ今度のコスプレでも彼女来るらしいぜ」

「ああ、あそこでだな」

「あそこ！？ああ」

啓太郎はあそこと聞いてそこが何処なのかわかった。彼はダンスの他にもコスプレ会場に行くことを趣味としているのだ。彼がするわけではなくそれをしている女の子達を見るのが好きなのだ。あそこと聞いて何処かわかる程にまで入れ込んでいる趣味であるのだ。

「あの会場か」

「あの娘また出るかな」

「ああ、あの娘か」

「あの娘!？」

彼等の話を仲間達と休憩しながら耳だけで聞く。彼がマークしていない美人がいるのかと思って何でもないふうを装って真剣に聞いていた。

第二章

「一体誰なんだ、そりゃ」

「奇麗だよな」

「そうだよな。しかもスタイルもいいしな」

「奇麗でスタイルもいい」

そう聞いてすぐに好奇心が湧いた。好奇心と言うよりも多分に古い言葉であるがスケベ心であるが。彼も年頃なのでそういうものもまたあるのである。

「そんな娘がいたのか」

そこには確かに美人や可愛い娘が多い。それを知っているからこそ行くのでもある。しかしだ。全ての女の子をチエックしていると自負していただけに彼にとっては今の話は聞き捨てならないものだったのだ。

それを聞いてプライドも傷つけられた。本人の中だけだが。こうなっては彼も行かないわけにはいかなかった。少なくとも彼の中ではこう思うのであった。

「俺としたことがな。マークを怠るなんてな」

「今度は何のコスプレかな」

「きわどいのがいいよな」

「あの娘派手な格好も好きだしな」

「派手好みか」

それを聞いてさらにはやる気持ちになるのだった。

「増々いいな。そんな娘がいたら」

是非共。そう考えるのだった。それで。

「ああ、今度の休みな」

休憩中なのでジュースを飲んだり一息ついたりしている仲間達に声をかけた。皆めいめいベンチに座ってそこでくつろいでいた。

「ああ、どうしたい？」

「何かあったか？」

「俺ちよつといないから」

「こう言うのだった。」

「悪いな、それで」

「ああ、別にいいさ」

「事前に言ってくれたしな」

それでよかった。お気楽な部活なのでそれでよかったのだ。実際のところ顧問の先生もあまり顔を出さず生徒達に任せているので彼等も気楽にのびのびとダンスを楽しんでいるのだ。そうした部活であつた。

「じゃあまあそういうことだな」

「ああ、それじゃあな」

こうして次の休みのコスプレ会場への突撃が決定した。彼はそれを決めるとすぐにネットでそのコスプレ会場のチェックをした。ついでに常連の女の子のサイトも覗く。皆恥ずかしそうだったり誇らしげだったりそんな顔でアニメやゲームのキャラの服を着ているのである。

「目立つ娘で常連みたいだしな」

すぐに見つかるだろうと思つた。とりあえず彼にしてはチェックしていない可愛い娘を探せばそれで見つかると考えていた。あの見物人達が美人でスタイルもいいというからそんなタイプを当たればいいかとも見当をつけてもいた。

その結果暫くして。その会場の写真で一人見つかった。黒髪で背が高く綺麗な顔立ちの女の子だった。

「ああ、この娘か」

確かに彼の知らない娘だった。しかも噂通りの美人だ。

「確かに綺麗だな。スタイルもいい」

そこは会場のサイトであつた。注目の女の子として彼女と思われる写真が数枚あつたのだ。見ればあるゲームに出て来るヒロインの格好をしている。アイヌ民族の格好である。

「このキャラの格好は今でも人気あるけれどそれを上手く着こなしてるな」

それが格好を見た彼の感想であった。

「けれど何か」

そのうえで彼は写真を見てふと思うのだった。

「何処かで見えたか？」

彼女の写真を見回っていくうちに思ったことである。

「名前はユイちゃんか」

ここで彼は引っ掛かるものを感じた。しかしその引っ掛かるものが何かまではまだ心では実感としてわからなかったのである。

「一応憶えておくか。さて」

とりあえず調べるのはこれで終わるのだった。その日は寝ることにした。

「寝るか」

そう言ってパソコンの電源を落としてベッドに入った。そうして次の日はいつも通り学校に向かったのだがそこで由比が彼にこう言ってきたのだった。

第三章

「今度の休みはいいわよ」

「えっ！？学校でいいの？」

「教室は駄目だけれどね」

相変わらず奇麗なのに無愛想な顔と調子で啓太郎に言ってきた。

あの時と同じで周りには彼の仲間達もいる。

「他の場所だったらいいわ」

「何でまた急に」

「何か文句あるの？」

これまたかなり高圧的な言葉であった。

「先生がいろいろ言っていたから」

「あれ、おかしいな」

今の言葉を聞いて仲間の一人が首を捻るのだった。

「この前は先生がいろいろ言っているにしても規則は規則だって言っていたよな」

「そうだよな」

彼等は口々に言う。そういえばそうなのだ。

「それでどうして今そうなるんだ？」

「何かおかしくないか？」

「おかしくはないわ」

しかし由比の言葉は変わらない。ついでに言えば表情も変わらない。

「校則では教室ではしたら駄目になってるだけだから」

「他ならいいのよ」

「そうよ」

無愛想なままで答えてくる。

「ただ持ち物は教室に置いていいわ」

「そうなのか」

「そうよ。今はね」

「!?!今は」

啓太郎は今の由比の言葉が引つ掛かった。

「今はって!?!」

「あつ、何でもないわ」

一瞬だがその顔に焦りが見えたように思えた。しかしそれはほんの一瞬のことだったのですぐに消えてしまい見間違いかとも思った。「とにかく教室で練習するのは駄目だけれど物を置くのはいいからね」

「了解。まあ規制緩和ってことだよな」

「そうだよな。それでよしとしますか」

「そういうことだから。それじゃあ」

「わかったよ。有り難う由比ちゃん」

「由比ちゃんじゃないわ」

それにはまた言い返してきたのであった。

「高見沢って呼んで」

「わかったよ、高見沢さん」

苦笑いでそう呼ぶ一同であった。とりあえず今回は学校の中で練習ができてしかも教室も一応使えることになったのだった。

だがそれは啓太郎には関係がなかった。とりあえず今度の休みはだ。

「御前は次の休みはいないんだな」

「悪いな」

これは前に言った通りであった。

「そういうことだな」

「ああ、わかってるさ」

「そういうことだな」

こうして折角の学校を使ってもいい休みに彼はコスプレ会場に行くことにした。しかしこちらも趣味だったので悪い気はしていなかった。学校に帰ってまたコスプレ会場についてネットで調べるので

あった。調べるのは主にそのユイという女の子であった。

「確かに綺麗だな」

調べれば調べる程その感想を持つ。

「しかし。何だろ」

それと共にこの感想も抱くのがあった。

「どっかで見たかな」

そう思うのがあった。だが彼はこう思った。

「結構色々な会場回ってるしな。そこで見たかな」

コスプレ会場は一つではない。それこそあちこち回っている。だからこう思ったのである。

しかしだ。それでも引つ掛かるものを感じ続けていた。それが気になるのがあった。

「もっといつも見ているかな」

次に思ったのはこれであった。

「だとしたら誰なんだろう」

誰なのか考えるが学校には彼の知っている女の子でコスプレをやっているような娘はいない。それに見ればこのユイという娘はメイクをしている。だから余計にわかりにくかったのだ。

「まあいいや」

いい加減わからなくなってきたので考えるのを止めた。

「考えてもわかりそうにないし。とりあえず会場に行ってみるか」

こう思ったところで結論にしてこの日も寝るのだった。そして休みになってコスプレ会場に行く。同人誌を少し漁った後で女の子達がいる方に向かった。もうそこには女の子達が集まっていた。

「さて、と」

彼はまずはあちこちにいるアニメやゲームのキャラクターの服を着た女の子達を見回す。スタイルのいい娘もいれば綺麗な娘もいる。目の保養としては最高であった。

その中には彼もよく知っている娘もいた。しかし今は彼女達を真面目に見ずにあの女の子を探るのであった。そのユイという娘をだ。

「何処かな」

「あっ、今日はそのキャラなんだ」

「ユイちゃん似合ってるよ」

左手の方からこっす声が聞こえてきた。

「あつちか」

その声を聞いてそのユイという女の子を探した。暫く探していると人だかりを見た。その中央に女の子がいるのが見えてもいた。

「彼女かな」

その女の子を見て思った。見れば髪までウィッグで決めている。

「可愛いじゃない」

「可愛いっていつか綺麗だね」

彼女の周りにいる男達が笑顔でこっすをかけているのがまた聞こえてきた。

「金髪がね」

「そうそう」

見ればある有名なRPGの五番目の作品のヒロインである。金髪で後ろはおさげの髪である。緑の服にスカートの出で立ちで有名である。

「スタイルも相変わらずだし」

「有り難う」

「あれっ!?!」

啓太郎は今の声を聞いて違和感を感じた。それはここで聞くとはとても思えない声であった。

「まさか」

「最初はどうしようかと思ったのよ」

話しているのはその女の子だった。にこにこ笑っているのもわかる。

「それでもやってみたら皆がいいって言うってくれるから嬉しいわ」

「あれっ、声は同じだけれど」

別人かと思った。あの娘はこんなに笑った声は出さないからだ。

それをいぶかしみながらその女の子のところに入る。すると。
「えっ!?!」

その女の子が彼の姿を見ていきなり驚きの声をあげたのだった。
彼の顔を見て目を丸くさせている。明らかに驚いた顔であった。

「木戸君、どうしてここに」

「俺を知ってるってことはやっぱり」

誰なのかわかった。そういえばそのコスプレネームは。

「由比ちゃん……いや高見沢さん!?!ひよっとして」

「どうしてここにいるのよ」

そのヒロインの服のまま驚いた顔をしている。顔はメイクであまりわからないようにしていたようだ。自分ですべてを隠せばもうどうにもならなかった。彼女の自爆であった。

第四章

「どうしてって。コスプレの女の子見るのが俺の趣味の一つだから」
「そんな……」

それを聞いて絶句する由比であった。

「そんなこと聞いてないわよ」

「聞いてるも何も」

啓太郎もまた狼狽していた。こんなことは考えもしなかったからだ。

「何でまた」

「あれっ、この彼って」

「ユイちゃんの知り合いなのかな」

「えっ、ええ」

由比は何とか落ち着きを取り戻しながら彼等の言葉に答えた。

「一応は。あつ、木戸君」

また焦った感じにすぐなってその彼等に答える。

「また後でね」

「あつ、ああ」

啓太郎もそれに頷く。何とかこの場を取り繕ったのだった。場を取り繕うととりあえず彼はその場を離れ由比もコンテストに向かった。コンテストで賞を取ってトロフィーを手に入れた彼女のところにあらためて向かう。ちょうどお昼で会場の隅の階段のところに腰掛けてお弁当を食べていた。彼は丁度そこにやって来たのである。

「お昼食べているんだ」

「ええ、まあ」
見れば由比は階段の端で小さく座ってそのお弁当を食べていた。

彼の方に顔を向けて答えてきたのだった。

「木戸君はお昼はどうしたの？」

「コンビニでサンドイッチとフランクフルトとか買って食べたよ」

コスプレイヤー

「そうなんだ」

「うん、だからもうフリーなんだ」

こう由比に答えた。

「高見沢さんはこれからみたいだけれどね」

「そうよ」

恥ずかしそうな顔で彼に答えてきた。

「今から食べるのよ」

「そうなんだ。ところで」

ここで彼はふと彼女が今膝に置いて食べているそのお弁当を見た。青い丸い箱の中はお握りと卵焼き、人参にレタスにプチトマトといったメニューであった。見ればお店のものではない。

「手作り？」

「そうよ」

啓太郎の問いにくくりと頷いて答えてきた。

「いつも自分で作ってるのよ」

「そうだったんだ」

言いながら前に出る。そうして由比の隣に来た。といっても階段の端と端であるが。その隣に来たところでまた彼女に声をかけた。

「隣いいかな」

「ええ、いいわよ」

「それじゃあ」

彼女の許しを得て隣に座る。それからお弁当を食べ続けている彼女に対して問うのであった。

「ところでさ」

「何？」

「何時からやってるの？」

「コスプレのことを尋ねてきた。」

「中学生の頃からよ」

「随分前からなんだね」

「まあ。そうね」

やはりここでも恥ずかしそうに答えてきた。俯いた顔が赤くなっているのがわかる。

「何でまたしてるのかな」

「アニメとかゲーム。好きだし」

「そうだったんだ」

「そのキャラクターを見ているうちに自分もこんな格好がしたいな
って思っ
て」

「それではじめたんだね」

「そうなの」

またこくりと頷いてみせてきた。コスプレをはじめた理由としては非常によくある理由であった。簡単に言うとキャラクターへの憧れである。

「それではじめていみたら楽しいし皆が注目してくれるし」

「趣味になったんだ」

「今じゃ。何十着も持ってるわ」

「こつも答えてきた。」

「学校とは違っ
て。とても楽しくて」

「学校とはねえ」

「やっぱり驚いたわよね」

今度は彼女の方から言ってきた。

「私がこんな格好してこんな場所にいるなんて」

「まあね」

その言葉は否定しなかった。彼も嘘をつくつもりはなかった。

「まさかと思ったよ。サイトを見た時には引っ掛かったけれどね」

「やっぱり。そうよね」

彼女もネットのことは知っている。だがまさか見つかるとは思っ
ていなかったのだ。

「そこにも映っていたの」

「綺麗に映っていたよ」

由比の顔を見て微笑んでみせる。だが彼女は俯いたままであった。

「そこでわかるなんて」

「わかったのが嫌なの？」

「ええ。だってこれは」

由比は俯いたまま彼に話すのだった。

「秘密の趣味だから」

「そう、秘密だったんだ」

「学校ではそんなの絶対に言わなかったわ」

こつも言う。その言葉には真剣な響きがあった。その響きは啓太郎にも伝わった。

第五章

「絶対になんだね」

「何があってもね。だって私」

彼女の声に真剣さ以外のものも加わった。それは深刻なものであった。

「学校じゃあれじゃない。真面目で通ってるし」

「そうだね」

彼女のその言葉に頷いた。

「生真面目で厳しくてね」

「厳しいの」

「うん、とてもね」

これは事実なので彼もはっきりと述べた。

「嘘はついてないよ」

「そうよね、やっぱり」

本人も自覚がある。だからそれを否定もしなかった。やはり俯いたまま答えるのだった。

「私って。厳しいわよね」

「それはいいさ。だって高見沢さん別に意地悪でも陰険でもないし」

「それでいいのね」

「うん、皆も嫌ってはいないよ」

これもまた事実だ。実際のところ由比は厳しくはあるがだからといって意地が悪いわけでも陰険でもなく筋が通っているので誰も嫌ってはいないのである。そういうことであった。

「だからそれは安心してね」

「有り難う」

「御礼はいいし」

そもそも言われる義理もないと思っていた。

「それは別にね」

「そうなの」

「そうだよ。それでね」

啓太郎はまた言う。

「どうするの、これから」

「どうするのって？」

ここではじめて啓太郎に顔を向けた。しかし角度はまだ俯いたままである。

「だからさ。これからどうするの？」

また由比に問うた。

「コスプレ。続けるの？どうなの？」

「見つかったから」

まずはこう答えてきた。

「だからもう」

「止めることはないよ」

そこから先は言わずにこう言ってみせた。

「全然ね。続ければいいじゃない」

「けれどもう」

「言わないよ」

また顔を正面にして俯いた顔になる彼女にまた言った。

「当然ネットでも書かないしね。画像だって撮ってないし」

「言わないの」

「勿論見返りも要求しないよ」

「そこも言ってきた。」

「全然ね。それは安心して」

「何でそこまで守ってくれるの？」

好意を受けるいわれはないのでそれが気になったのだ。無意識のうちに尋ねた。

「私は木戸君に何もしていないのに」

「何も？」

「そう、それどころか」

コスプレイヤー

ここからは思い当たるふしがあった。

「ダンスのことだって許可出さなかったし」
「それはそれだよ」

しかし啓太郎はそれはよしとしたのだった。

「ダンスのことは確かに腹が立ったけれどね。それはね」
「いいの」

「だからそれはそれだって」
「またそれを言ってみせた。」

「全然ね。安心していいよ」
「有り難う」

それを言われてまた礼を述べるのだった。

「だから御礼はいいって。それでさ」
「ええ。それで」

話が戻ってきた。

「コスプレは続けるよね」
それを問うのだった。

「どうするの？僕は言わないけれど」

「私が決めるだけなのね」
「そうだよ。どうするの？」

それをまた問う。

「高見沢さんが決めればいいよ」
「そうね。やっぱり私は」

「そこまで言われて下した決断は。」
「続けたいわ」

「じゃあ続けるんだね」
「ええ。好きだから」

「こう述べるのだった。」
「続けたいの。どうしてもね」

「それでいいじゃない」
「ここまで聞いてまた言ってきた。」

第六章

「決まりだね。それでね」

「それにしてもどうして私に」

「だから言つたじゃない」

啓太郎は由比にさらに述べる。

「嫌いじゃないからよ」

「嫌いじゃないから？」

「そういうこと。あつ、それでもね」

ここで前置きをしてきた。

「別に高見沢さんを愛しているとかそういつのじゃないよ」

「恋愛感情はないのね」

「うん、それはね」

これは断つておくのだった。

「安心していいよ」

「別に私はそんな」

「そんなつて？」

「もう彼氏もいるから。どっちにしろ」

「えっ!？」

それを聞いて顔を顰める啓太郎だった。

「いたの、彼氏」

「ええ」

今度は顔を赤らめさせてこくりと頷いてみせてきた。

「そうなの。実はね」

「それ………嘘でしょ」

「嘘じゃないわ」

赤い顔のままでもた答えてきた。

「お隣の同級生の。学校は違つけれど」

「お隣つて」

「何？」

「お隣って何か」

啓太郎はそれを聞いて頭が白くなりそうだった。だがその中で懸命に己を保ちながら由比に対して言う。しかし何分頭が白くなりかけているので言葉はとんでもないのが出て来た。

「若奥様って何か何か」

「エプロンも。着たことあるわ」

「それって」

それを聞いてさらに気付いたことがあった。それは。

「経験。してるんだ」

「そうなの」

こくりと頷く顔がさらに赤くなっていた。

「実は。もう」

「意外って何か何ていうか」

「これも。内緒よ」

また恥ずかしそうに啓太郎に言ってきた。

「こんなの。知られたらとても」

「わかってるって。こんなの誰にも言わないからさ」

啓太郎はそれも保障する。由比にとっては今は何よりも有り難い言葉であった。ほっとした顔になってまた言うのだった。

「そう、よかった」

「よかったついでにさ」

啓太郎がここでまた言う。

「何？」

「またここに来ていいかな」

「こう由比に問うのだった。」

「ここにつて？」

「だからコスプレ会場にさ。その服似合ってるよ」

にこりと笑ってみせて由比に顔を向けて言う。見れば彼女はまだ正面の方に顔を向けて俯いているままである。ずっとそうしたまま

だ。

「他の服も写真だけだけれど似合ってたし」

「似合ってたのね。よかった」

「だからさ。見に来ていいよね」

また彼女に問う。

「またここに来て」

「内緒にしてくれたら」

やはり正面を向いて俯いたままだった。そのまま啓太郎に答える。

「いいけれど」

「運。それじゃあそういうことだね。それにしても」

「それにしても。何？」

「人ってわからないものだね」

俯いたままの由比に対して啓太郎は上を見上げた。上には空がある。

「まさか高見沢さんがね。コスプレが趣味で彼氏もいるなんて」

「誰だって。顔は一つじゃないから」

「そうだね」

そのことをあらためて認識する。認識してみればどうということはないがそれでも認識するまでに何かと思うものがある。例えばそれが短い間であってもだ。そのことがよくわかった。

「じゃあまた来るからね。その時は宜しくね」

「ええ。ただ」

「わかってるって」

お弁当を途中で中断したままの由比だったがここでまた食べはじめた。そんな彼女を横目で見つつまた上を見る。そこには青い空が広がっている。

「いい天気だしさ」

「ええ」

食べながら啓太郎の言葉に応える。

「綺麗な写真が一杯撮れるね」
「そうね」

最後はそんな話だった。普段の厳しい由比は何処にもいなかった。だがそれがかえってよかった。ただ厳しくて生真面目なだけの彼女ではないとわかったから。啓太郎はそのことの中に微笑みながら会場の上に広がる青空を眺めていたのであった。少しずつだがその顔を明るくものにさせていく由比の横で。穏やかにその空を見上げていた。

コスプレイヤー 完

2008・3・3

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932e/>

コスプレイヤー

2008年11月7日07時14分発行